

小学校高学年を対象とした「くずし字」指導と文化財教育の融合

教育学部 大橋直義

【本共同研究の背景】

平成 29 年告示・小学校学習指導要領解説における習得すべき〔知識及び技能〕第三項には「我が国の言語文化」が掲げられ、「指導の改善・充実」が企図されている。教科書には理解しやすい物語・舞台芸能などが取り上げられ、学校現場では様々な創意工夫がなされてはいるが、地域に伝存する文化財教育との親和性を想定した際、「くずし字」が障壁となる。

日本各地には、現代日本人の 99%以上の人々がもはや読むことのできなくなった文字で記された文化財が無数に存在しているが、その内容を把握するための「くずし字判読 A I」の開発競争が世界的規模で推進されていることは周知の事実である。文化財教育のみならず、そういった未開の沃野への参入障壁を極力小さくしてゆく努力が求められている。

なお、本共同研究は、昨年度に行なった同名の共同研究からの継続課題である。

【本共同研究の目的】

小学校高学年児童を主たる対象とした、「くずし字」を楽しく学びながら、「我が国の言語文化」の基礎となる文化財全般（特に文献資料）への関心を増大させるため、6回1セットの授業計画を作成し、それを学部学生による授業というかたちで実践すること。

ただし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大とその防疫という観点からは、学部学生が授業者となって現地で指導を行なうことはきわめて困難な状況であることは共同研究の開始段階から明らかであった。したがって、オンラインでも指導可能な教材コンテンツを開発することを目指し、共同研究を行なった。

【実施内容・概要】

[2020 年 11～12 月]

研究代表者および教育学部 国語教育専攻に在籍する大橋ゼミの学生 6 名によって、「くずし字」を学ぶための方法およびその内容についての会議を行なった。そこで、全 6 回の授業のうち、今年度は第 1 回および第 2 回のオンラインコンテンツ作成を行なうこととし、下記のような授業概要を制作することとした。

第 1 回：渋川版御伽文庫『うらしま』を用い、現代の小学生が知悉する「浦島太郎」の物語との相違点に着眼しながら、変体仮名と漢字（字母）との関係を理解し、文字を読む楽しさを学ぶ。

第 2 回：地域にまつわる物語でもある『道成寺縁起絵巻』を取り上げ、その物語の内容を

追いながら、未習の変体仮名を読み、また使用頻度の高い漢字も読みとれるように学ぶ。

なお、上記（特に第1回）の授業内容は昨年度に作成していたものであるが、それをオンライン（Zoom環境）上でも行ないうるかたちへと最適化し、かつ昨年度までの反省をふまえてブラッシュアップしたものとした。

[2021年1月]

学生の自発的研究により、上記2回分のコンテンツを作成した（古典籍画像のトリミングおよび加工などパワーポイントファイルの作成、ワークシートの作成、くずし字を読むための一覧表の作成、授業計画・指導案の作成など）。

[2021年2月1日]

附属小学校5・6年F組（平井千恵学級）において、第1回および第2回の授業を行なった。当日は、現地に平井教諭および大橋が臨席し、スクリーン・音声・zoomミーティングの回線確保や資料の配付などにあたり、栄谷キャンパス内からのオンライン授業を行なう学生のサポートを行なった。

なお、このときの6年生の児童は、昨年度の共同研究において5・6年F組（宮脇隼学級）での授業を行なった際に5年生であった児童である。したがって、第1回の授業は既習事項となったのだが、事後のアンケートの集計によれば、ある程度、内容をおぼえているということが学習意欲につながったものと理解できる。

[2021年2月3日]

附属小学校4年B組（宮脇隼学級）において、第1回の授業を行った。今年度のみならず、これまでに「くずし字」授業を行ってきた経験では、もっとも年少の学年にあたる。それゆえ、授業が成立するかどうか不安な点も多分にあったが、現在、一般に通行している「浦島太郎」の物語と異なったかたちの「うらしま」が存在していたことそのものに対する関心も含め、かつての「言語文化」への関心を拓くことができた。

【成果と課題】

「くずし字」授業は国語の分野のみならず、社会（地歴・日本史）においても重要な観点となる。社会科としても使える授業コンテンツの開発や、県立・市立博物館および本学紀州経済史文化史研究所との協働も不可欠である。

その一方、今年度の特異な状況下において、今後に繋がりうるオンラインコンテンツ作成に向けた方法論の構築が行なえたことは大きな成果であったと位置づけられる。

